

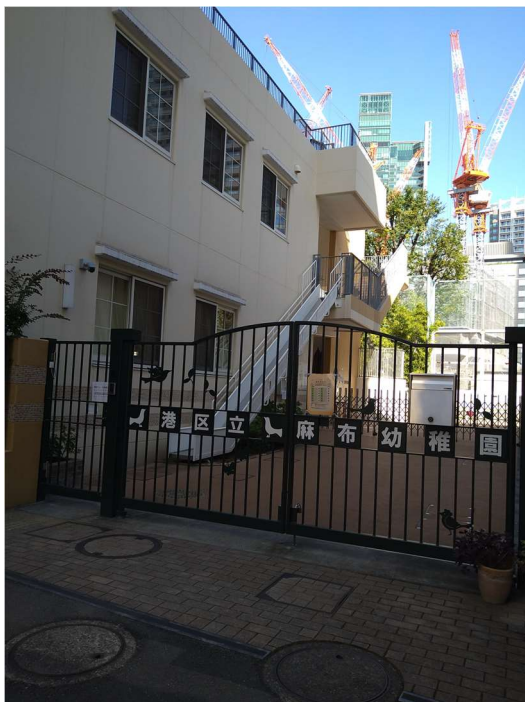
明坂（山田）智子の思い出

第1章 明坂家 謙三・謙一の渡満

智子の祖父謙三は1874（明治7）年和歌山に生まれる。呉服商を営んでいた。30代で満州に渡り新京（長春）で屋号「みしまや」の呉服屋を始めた。1905年の日露戦争で日本は満州の權益を獲得している。謙三が呉服屋を満州で始めるにあたって、東京では越後屋が先行して無理だと考え、満州に渡ったと言う。「みしまや」と言う屋号は3人の島がつく人がスポンサーだったと言うがそういう渡満者への支援者（出資者）がいたのであろう。また謙三の結婚については、謙三が和歌山で得意先の大西家に入入りし、その娘の秀（ひで）と一緒になろうとしたが明坂家は差別を受ける家柄だと反対されたので駆け落ちしたと言う。謙三と秀は満州の新京で軍人などを中心に呉服屋商売を広げていった。秀の弟の大西庫治はハルピンで仕事をしていて満州大西家とは交流があった。ちなみに智子が後に結婚する山田瑞穂の父直之介も満州に渡っているが1921年のことであり時代は少し後となる。

智子の父謙一は謙三の長男として1899年に生まれる。父と一緒に満州に渡ったと思われる。1914年頃旅順工科学堂（工大）に在学した後1918年頃内地の東北大学工学部に入学した（冶金専攻）。その後ボシュロムという外資系のレンズ会社に入社。1930年頃謙一は海外研修で米国に居たことがある。家族については、1923年頃大阪の西村てると結婚。大阪に住んでいて、1924年には長女満智子、1928年次女美智子が生まれた。東京転居後1931（昭和6）年には三女として智子が生まれた。東京では麻布（我善坊町）に住んでいた。

智子が在籍した麻布幼稚園（現在）



麻布辺りの地図（年代不詳）



一方、満州では謙三が1923年1月死亡。家業は妻秀（ひで）と親戚で続ける。呉服屋は順調に事業拡大していた。1937年頃秀が亡くなったので、長男の謙一が満州に呼ばれ、一

家は渡満することとなった。謙一は呉服屋経営を西村の親戚に任せ、知人の紹介で撫順の満州軽金属に入社。主として営業、経理の仕事に従事。1938年には四女桂子が出生。ところが1945（昭和20）年に謙一は49才の若さで生涯を閉じる。この間1942年頃山田直之介が満州軽金属の撫順に理事で赴任して謙一とは一時期上司部下の関係にあった。

1945年8月には終戦を迎え、満州は大混乱となるが、大黒柱を失った明坂家には、苦難の引揚げが待っていた。



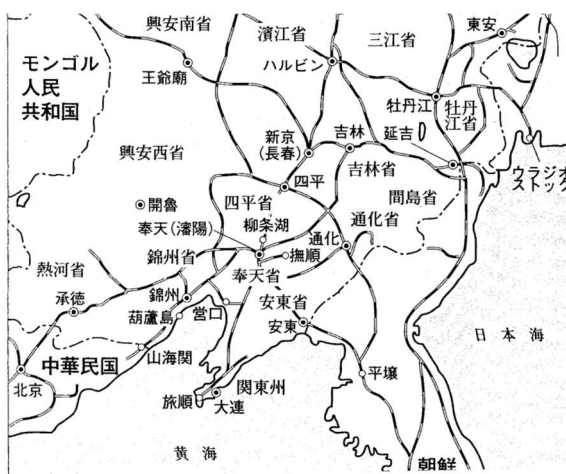
みしまや 新京 1939(昭和14)年正月

第2章 智子の撫順生活

智子は昭和13年5月に母と美智子と共に渡満。前年、父と満智子は先発していた。日満航路4日の旅。吉林丸に乗り門司経由で渡った。6月に一旦撫順市内の七條小に編入し、秋に工業地区の望花小に編入し直している。この時4年年上の美智子は小学校高学年。満智子は女学校に在学。望花小学校は工業地区の日本人社員の子女の学校で、男女共学であった。



満州に渡る 吉林丸 1938(昭和13)年5月



(地図の出典：重田敏弘(2003)『母と子でみる「満州」再訪・再考』草の根出版会)

満州地図

撫順市

撫順は撫順炭鉱を中心とする鉱工業都市。1937年より市制施行。満鉄が炭鉱採掘並びに会社経営にあたり、市の行政も統括。撫順の石炭は鞍山に運ばれ、鞍山鉄鉱石と共に鞍山製鉄所での鉄の生産に使われた。

撫順市街は道路が東西南北に整備され、北より一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十と名付けられていた。七條小学校は東七條にあった。

撫順炭鉱のある工業地区は市街地から少し離れて、鉄道で結ばれていた。工業地区には満州軽金属、撫順液化化学があり、後に栗本鉄工所が進出してきた。

望花小学校

日本人のみの学校で、先生も日本人。中国語教育はなかった。満州は五族協和（和韓満蒙漢）の精神のもと、多民族が共に栄える理念があったが、現実には日本の植民地で日本のための教育が行われていた。従って、算国社理、体育の教育は内地と同じ、音楽は楽器が少なく歌が中心、各教室にオルガンがあった。一学年 50～60 人程度（一、二学級）。

冬には校庭に水が張られスケートリンクとなり、子供達はスケートをして遊んだ。暖房はスチームによるセントラルヒーティング（ストーブはなし）が完備されていた。給食はなく皆弁当持参。



ピアノレッスン

奉天の白系ロシア人（ロシア革命からの亡命貴族）と思われる男性が毎日曜日ピアノを教えるに撫順に来ていた。このロシア人に明坂家の娘達はレッスンを受ける。彼はヤマトホテルの音楽指揮者でもあり、ホテル専属のオーケストラを指揮していた。

奉天では毎年5月にピアノの音楽発表会とオーケストラコンサートが開催され、智子や満智子初め撫順、奉天の日本人子女が多数出演していた。その数 20-30 人で日・露人混成で国際色豊かな演奏会であった。

大詔奉戴日の式典 12月8日

撫順市では市内の全生徒が撫順駅前に整列し、大詔奉戴日の式典が行われた。

朝は氷点下 20 度の寒さの中、一時間余立ち尽くす。詔勅朗読に続き、校長・来賓の挨拶が行われ、畏まって拝聴する。君が代、満州国家を斉唱。防寒着を来ている子女は少なくほ

とんどの子供達は寒さに震えていた。

修学旅行

小学校四年生からは毎年修学旅行に行った。四年生は奉天、五年生は新京・ハルピン、六年生は大連・旅順であったという。智子はこの時初めてお小遣いをもらった。みやげなどを買うためだろうか。しかし、普段好きなものは何でも与えられていたのでお金を使ったことがなく、お金はすぐ使い切ってしまうと後悔したようだ。新京やハルピンには親戚が居たので、修学旅行なのに親戚宅に宿泊した。ハルピンで食べたロシアのスープがおいしかった。

一度中国人の孤児院を見学したことがあった。赤ん坊が窓際の箱に捨てられると中で係の人が気づく仕掛けがあって、それを面白いと思ったと言う。可哀想な子供達を救う仕事に何か崇高なものを感じてこんな職業につけたらいいと幼いなりに思ったらしい。長じてユニセフや足長会に寄付することになる智子は幼い頃にその萌芽があった。新京の日本軍人の慰霊碑、忠霊塔を見に行った。長い距離歩くのがとても辛かった。一人一人旅行に板を持参して列車内に泊まる時それを椅子に渡して寝たという。夜行列車利用が多かったのだろうか。当時歩く以外は鉄道しか移動手段がなかった。

小学校高学年の思い出

四年生から男女別々のクラスであったが、人数も少なかったので五、六年生は男女共学であった。六年の時男子（〇〇）が級長になって智子は副級長で何かと一緒にいる機会が多かった。智子は講堂として使っていた大きな部屋を、その子を誘って棒雑巾で掃除した。一日だけでなく何週間も続けた。これは初恋だったのだろうか。

六年生の運動会の際は放送部で広報を担当した。次は〇年生の徒競走です、とでも言っていたのだろうか。クラスの中で目立つ子であったようだ。

六年生の音楽担当の八木先生が朝礼の後クラシックのレコードを聴かせた。全校放送であり、皆が教室に入らず立って聴いていた。

六年生男子には教練（戦争に備え体を鍛える訓練）があった。女子にはなぎなたの稽古があった。

卒業時普通男子が行う答辞朗読を智子が行った。当時父謙一が父兄会長を務めており、記念品は通常女子が受け取るが親子でやりとりするのはさすがにまずかろうとのことで入れ替わったのだと言う。

七條女学校

昭和19年の4月からは智子は七條女学校に進学した。この頃姉の満智子、美智子は女学校を卒業後、満州軽金属で働いていた。女学校と言っても戦時色が強く、智子のクラスは第四中隊の第四小隊であった。智子は1年の8月迄は勤労奉仕の草抜きの記憶しかない。永安苗法と言って、松の苗が気の遠くなるほどの大地に延々と植えてあったが、苗の周りの草をひたすら抜いていく。行けども、行けども大地が続き、そこの草取りをさせられた。暑かった。9月からはそれでも勉強が始まった。終戦の前の年のことである。

2年目も同じような女学校生活を送るのかと思っていたら、父が4月に突然他界した。友達の父親の中に亡くなる人が幾人かいて、智子は自分が第四中隊第四小隊に属しているので、四・四という数字が死を連想させ、自分に回ってくるかも知れないと言ったら、それが現実

になった。



謙一家

父の死

昭和 20 年の正月、父に黄疸が出た。あら、おかしいわね、顔が黄色いわ、ぐらいの状態で普段の生活はいつもどおりだったが、撫順の病院では治すことはできないので、奉天に京大の先生がいらっしゃるとのことで 3 月に奉天の病院に移って、手術することとなった。手術前の入院は家族交代で付き添った。黄疸はビリルビンが肝臓や胆管を素早く通過できないため、血中に蓄積し、皮膚に沈着する病気。父の場合は胆管狭窄症であった。4 月 6 日手術当日も元気そうな様子でストレッチャーなんかいないよ、と言っていたが、手術がなかなか終わらずいつまで経っても戻って来ない。何でも麻酔が切れて長時間痛みをこらえていたとのこと。手術室から出てきた父は既に虫の息であった。それから三日のうちに父は息を引き取った。智子は父さんっ子だったので、寂しかった。

女学校は特段召集がかからない限り、電車通学生は通学無用であった。空襲があるかも知れず、安全を考えてのこと。智子はほとんど家に居た。父が亡くなったが社宅には引き続き住めたので、生活が激変することはなかった。

終戦になって会社が閉鎖され男達は炭鉱に働きに行った。父が会社に預けていたお金が家に戻って来て、このことがいつの間にか周囲に知られてしまい、幾人も金を借りに来た。職がなくなり、新しいことを始めるのに元手が要る等の訴えを母は断り切れず、その度に嘆いていた。帰国後お金を返して貰うことは一切なかった。父のオーバーコート借りて行った人が一人律儀にコートを返しに来てくれたそうである。

第 3 章 引揚げ

終戦

昭和 20 年 8 月の終戦を撫順で迎えた明坂一家は社宅待機となった。

最初ロシア軍が来て満州軽金属、撫順液化化学、栗本鉄工所等の工場の解体を行い、多く

の設備を持ち去った。9月に国共内戦（国民党政府軍と共産党軍の内戦）が始まり、共産党軍（八路軍）が来た時は物資を供出させられたが、短期間留まるだけであった。これに対し、政府軍（蒋介石側）は軍政を敷いて統制が取れていた。配給が終わり物資を自由に買えるようになり、街で買物もできた。一般中国人も友好的にものを買ってくれた。

社宅では冬になっても燃料、食料はあった。満州軽金属の社宅は二家族で住むようになったが、その際山田家と一緒にになったこともあった。智子によるとこの間怖い思いをすることはなかったと言う。しかし、山田家がいた撫順市街の状況は全く違っていた。山田瑞穂の弟の啓介による記録を次に抜粋して記す。（瑞穂は内地で終戦を迎え、撫順には不在）

撫順市街や社宅街での終戦の状況

ソ連軍が撫順に進駐してきた時ソ連兵士は略奪を働いた。直之介（当時満州軽金属の役員であった）が奉天に出張していた時ソ連軍の状況を見ており、帰宅後山田家の撫順の家では準備が行われた。啓介の二人の姉は髪を短く切って男装し隠れる場所を決めた。生まれたての乳児がいたので母親は隠れるわけにはいかなかったので、顔に墨を塗り老婆を装い小学5年生の啓介が付き添うことにした。ある日ソ連軍が到着しいよいよ来るぞという時、姉二人は二階のトイレと立てかけてあった食卓の陰に隠れ、母も二階の居間に待機した。まず将校2人が来たが直之介が片言の外国語で応対し何か物を渡すと、家をざっと検分するだけで帰って行った。次に2名の若い兵士が自動小銃を手に押し入って来た。直之介が押し問答していると赤ん坊が泣き声を上げたので女が二階にいるぞと兵士2人は直之介と二階に上がってきた。老婆と乳飲み子と小学生しか見つからなかったが、兵士は他にもいるぞと家捜しを始め、直之助は肝を冷やした。食卓の陰の姉は見つからなかったが兵士はトイレも探そうとした。見つかってしまうと思ったが、既に姉はその場所からベランダに出て鶏小屋に隠れていた。鶏が騒いだがソ連兵は気づかなかった。この時直之介は娘を失ったものと諦めようと思ったと言う。ソ連兵は戻って来て銃を突きつけて何かを要求した。時計は既に渡していたので、現金が欲しいのだと直感した直之介は部屋を出て植木鉢を取り上げやおら階段の手摺りから階下に投げ落とした。この乱暴な行動に兵士は驚いたが、落ちて割れた鉢の下から現金が見えたので、兵士はそれをかき集めて慌てて出て行った。事なきを得たが、この時隣家では娘が暴行され自殺したと言うことであった。

啓介の手記は続く。撫順市街に居た役員及びその家族も郊外の工場社宅街で社員と一緒に居る方が良いとのことで移ることとなり、直之介の家族も引っ越すこととなった。しかし、撫順市街は当時中国人が敗れた日本人の家を津波のごとく群衆となって襲い、すべてを持ち去って行ったと言う。このような暴動をソ連兵も黙認していた。満州軽金属の役員の家はソ連の司令部となっており、ソ連兵に守られていたので襲われることはなかったが、そこから社宅のある郊外に安全に移動することが可能か、危惧された。昭和20年9月のある日、会社から応援に来た若者達と一緒に社宅まで移動することになった。電車の駅まではソ連兵が護衛してくれた。駅迄の道中も中国人群衆が満ちており、怒声を投げかけられる。護衛兵は時々空へ向けて銃を発砲、その度に取り囲む中国人は後ろに下がるがまた詰め寄って来る。そんなことを繰り返しながら駅にたどり着く。電車に乗ると別のソ連兵が警備につき、社宅のある駅に着くと会社の人が出迎えてくれた。必死の脱出行だったと言う。

社宅に着くと周囲は有刺鉄線で囲まれていて高圧電流が流されていた。正面や他の 2, 3 カ所の門衛所に社員が警護していて外からは簡単には入れなくなっていた。社員が自警団を組織して外敵に備えていた。ソ連軍が中に居て、接收した社宅を寄宿舍や本部として使っていた。ソ連軍は軍紀を守り日本人達を大切に扱っていた。電気、ガス、水道は今まで通りで、豊富な石炭資源のお蔭で完全集中暖房の地域なので、ソ連兵にとっても生活は恵まれていた。それら生活インフラを支えていたのは日本人技師なので、ソ連兵も日本人を活用する必要から敬意を払っていたものと思われる。

智子の見た社宅での終戦

智子は終戦を迎えても社宅で今までと同じく生活を送った。ソ連軍が入って来ることになったので、女は髪を切って男装した。兵士が家に入って来ることはなかったが、一度女性将校が来たことがあった。その時美智子が対応した。美智子は背が高く体格ががっちりしていた。女性将校には着物を上げたら喜んだと言う。ソ連軍の次に八路軍（共産党軍）が入ってきた。この時は共産党軍の赤い旗を掲げた。続いて国民党軍が入ってきた。この時は青天白日旗を掲げた。このように進駐軍は変わったが、基本的に社宅街は安全で怖い思いをせずに済んだ。社宅に山田家が移ってきてからは、明坂家は山田家の小さな子供をお風呂に入れてあげたり、ものがない間布団を貸したりした。このように助け合いをしたことで、明坂家と山田家は親しくなった。ただし、山田家の長男瑞穂だけは日本国内に居て不在だった。智子は学校がないこの期間、山田直之介から英語の手ほどきを受けた。津田のリーダーを使って発音記号からしっかり教わったという。

満智子のエピソード

父謙一死亡後会社関係者より縁談を勧められ軍人と結婚することとなった。この時 21 才頃で、本人は結婚を望まず結婚式の時も大泣きしていた。新婚旅行先ハルピンで逃げ、新京まで戻りみしまやの親戚にかくまわれたと言う。

満智子は父死亡後明坂が女だけの一家となったので、家を支える責任感が強かった。引揚げ時も一家の中心として振る舞うことが多かったと言う。なお、母てるは元来楽観主義者で引揚げ時も明坂一家とは別行動し、帰国している。

なお、父謙一の遺骨は満州に葬られた。と言っても終戦の混乱の時期墓を作ることはできなかった。それで謙一が生前好きだったゴルフ場に満智子が会社の人と埋めて来たという。

昭和 21 年 7 月引揚げ

21 年 7 月前半に山田家は帰国。7 月 20 日頃明坂家は引揚げ開始。引揚げ者の持ち出し金は一人当たり 1000 円に制限されていた。更に帰国上陸時一人当たり 1000 円が支給されるだけで金のやり繰りは大変であった。引揚げは撫順から鉄道の無蓋貨車で錦西まで移動。錦西から引揚げ港のある葫芦島までは徒歩であった。距離は 10 数キロ以上で重い荷物を運びながらの移動は大変であった。末の桂子は 7 才で重い荷物を持つての移動は無理だったので智子が持った。葫芦島に鉄条網で囲われた宿舎がありここに数日逗留。祖母が腹を下し洗濯用の水が必要で、これを金網越しに中国人から買っていた。

引揚げ船のリバティー号は続々と引揚げ者を乗せて出港して行った。貨物船を改造したもので船底に雑魚寝。一隻 2000 人の寿司詰め状態であった。持参の毛布にくるまって寝た。

舞鶴に到着したが、船で伝染病が出た模様で検疫に手間取り、1週間足止めされた。

引揚げの間、大きなトラブルはなかった。中国人による略奪や途中での脱落者（子供、老人の置き去り、死亡など）も明坂家の周囲では少なかったようである。引揚げ移動時の鉄道、航路のインフラが安全含めしっかり確保されていた。これには統制の取れた政府軍が治安をきちんと維持していたことが要因と考えられる。



引揚げ船リパティール号（立命館言語研究 25 巻 1 号より）

昭和 21 年 10 月頃まで（豊中）

舞鶴から京都まで来て親戚の西村家（当時大阪で被災し京都に居住）と再会。この時西村家も父は死亡、明坂家も死亡していて、双方相手の大黒柱の居ない状況に驚き落胆したとのこと。その後豊中の明坂の親戚を頼り逗留した。謙一の弟英夫は他界していたが、家族がいて、長男肇、次男英二、長女美都子、三男精三はみな年が近かった、なお、この精三の息子の真治氏が今も豊中に居て智子に数年前葉書を寄越している。

豊中で内職をしても一家の食い扶持を確保するのが難しいので、満智子は京都の西村家に移ることを決める。

昭和 22 年 8 月頃迄（京都）

明坂家は京都の西村家の向かいの寺の離れに逗留。満智子は京都で働き口を見つけて働く。

この頃山田家は京都の桂の豊田家宅に逗留している。明坂と山田が京都で再会できた。昭和 21 年 12 月に山田家のクリスマス会に呼ばれる。明坂美智子、山田明子は元撫順女学校の同級生であった。明坂智子、山田啓介も年が近かった。また、内地に居た山田家長男瑞穂が東北大学から京都大学医学部に入学し直し、引揚げてきた山田家と合流した。このことで、智子と瑞穂の二人がこのクリスマス会で初めて出会ったと思われる。

西村家での生活は短く翌年 2 月には満智子は単身東京へ向かい、そこで知人の紹介で就職する。続いて 5 月には母と美智子、桂子も上京。智子だけは女学校の都合で 8 月になってから上京する。上京の日、山田瑞穂が駅に見送りに来て、コンパクトを餞別にくれたと言う。しかし、瑞穂と特別の付き合いがあったわけではなかった。

東京での生活を経て結婚

東京では阿佐ヶ谷に住む。満州軽金属の知合いの離れに起居した。母、祖母、4 人姉妹が同居。満智子は軽金属の知合いの紹介で働きに出ていて、智子は女学校卒業の資格を取るた

め、中野にあった第5高等女学校の夜学コースに通いながら勤めに出た。

家の収入を少しでも助けたいと考え、智子は満智子の紹介で保阪運輸（満智子が結婚した入山が起こした会社）の横浜支店でタイプの仕事をした。子供の頃から遊びでタイプライターに触ったことがあったので、資格を取って働いた。原稿のとおりタイプする。この時カーボン紙で5, 6枚一緒にタイプすると写しができた。20枚くらいの写しを作るような仕事があった。保阪運輸は輸出入関係の仕事をしていて税関関係の書類などを毎日多数作っていた。

保阪運輸は倒産したため仕事は長続きしなかった。美智子の紹介で日本脳炎研究室での仕事をしたことがあった。これが断続的ではあるが一番長続きした。最初はビーカーの清掃から始めたが、そのうちネズミの頭に注射する仕事を任された。ネズミの脳に脳炎の菌を植える仕事である。ハツカネズミを飼育していて、そのネズミをつかまえて動けないようにして頭に注射する。弱ってくる過程を観察しデータを記録する。最後には解剖もした。ねずみに麻酔を打ち張り付けにし、解剖し、内臓を摘出する。その臓器の重さを量る。たとえ小さなネズミでも生き物を解剖することに初めは戸惑ったが、そのうち平気になった。

山田家の長女多見子の紹介で日本キリスト教視聴覚事業部の手伝いの仕事もした。これは銀座の一等地の教文館の8階にあった。政界ジープという雑誌社の仕事もやった。これは秘書のような仕事であったが、実質お茶くみだけの仕事でありすぐ辞めた。職が転々としたのは、女学校の夜学出で大した仕事をあてがわれなかったこともあるが、給料が安くつまらなかったことがあった。姉の美智子は商社OLで比較的安定した職場で勤務していた。

阿佐ヶ谷の住まいから新中野の上高田（鍋屋横町辺り）に移り、次に長原に移り、次いで練馬に移転した。練馬は初めての一軒家であった。大磯の土地が売れてそのお金で買った。ここで山田の家族と再び近所同士となった。山田の家族と風呂屋でぼったり顔を合わせたことも何度かあったと言う。クリスマス会にも呼ばれた。

そんな時昭和26年頃山田瑞穂より突然結婚の申込みの手紙が届いた。当時瑞穂は医師を目指していた。教分館に勤めていた智子はまだ若くて手紙を受け取った時戸惑った。同僚に相談したらいい話じゃないの、と言われ、姉たちも知らない人でもないし、と賛成してくれた。瑞穂は写真を幾度も送って来た。病院勤務だった瑞穂は医局メンバーや看護婦達の集まり等の写真を機会ある毎に送って来た（瑞穂の経歴によると昭和26年7月医師国家試験合格、9月京都国立病院医師として正式勤務開始とある。瑞穂は妻を迎える覚悟を持って手紙を書いたに違いない。）

昭和28年3月4日東京のYWCA会館で2人は厳かに結婚式をあげた。

明坂姉妹の結婚に纏わるエピソード

ここで他の明坂姉妹の結婚に纏わるエピソードをいくつか記録する。

満智子の場合。満智子は東京に戻って程なく入山家の晟一と結婚する。晟一には先妻がいて息子が一人居た。そんな晟一と結婚することを決めた満智子になぜ結婚するかと尋ねたら、歌舞伎に二人で行った時話があり、この人なら一緒になれると思ったということであった。満智子の結婚は昭和23年であった。しかしながら結婚生活は大変であった。義母との不仲である。明坂の家では満州時代から母や祖母がお三度をやって娘達が台所にはいるようなこ

とはなかった。満智子も時間があれば本を読むのが好きな娘であった。引揚げてからも生活を支えるのに精一杯で花嫁修業をすることもなく結婚したので家事ができず、そんな満智子に義母はことある毎に冷たく当たった。耐えかねた満智子はよく実家に避難してきていた。一度は娘の幸子がお腹に居て明坂の実家に避難していたとき、義母が押しかけてきた。そのときは二階に隠れていたとのこと。長原の家では表が通りで人の往来があり店を出せる作りだったので、満智子はお菓子屋を始めた。卸から菓子を仕入れ店で売る。これがいくらかの収入になった。入山家は上野毛に住んでいたが、晟一は仕事がないとき（保阪運輸は昭和24年頃不景気で倒産）この菓子屋を手伝った。アメ横で安く仕入れて売ったりした。その時にはいい稼ぎになったという。末の桂子はおはぎが売れ残った時たくさん食べられるので、おいしいものが食べられるこんな人と結婚できるのが羨ましいと言ったとか。義母との不仲は続いたがある時母てるが納めた。その後、義母は辛く当たることを止めた。

美智子の場合。美智子は背も高く美人で相当もてた。一度はプロボクサー（ピストン堀口）に結婚を申し込まれたこともあったという。市川吉也はぞっこんで会社の同僚にライバルがいたので、ある日屋上に呼び出して殴ったという。そのことで同僚は退職した。武勇伝として語られるが、後日上司が、退職した恋敵は優秀だったと嘆いたとか。昭和29年に結婚した。その日は大雪で式の開催が危ぶまれた。しかし、吉也は大雪の中美智子をおぶって会場に連れて行ったという。

桂子の場合。桂子は第4次南極観測隊で亡くなった福島伸からプロポーズの手紙を貰っていた。福島さんは京都大学博士課程まで修め、宇宙線の研究者。たまたま京都の西村の家の隣に住んでいて、明坂家が京都に居た時桂子は錦林小学校1年生で、福島さんの妹とよく遊んでいた。福島さんは京大在学中昭和33年34年の第3次南極越冬隊に参加している。彼はもともと研究畑であったが、小学校から大学まで同級生の北村泰一が第1次越冬隊に参加していたので、彼の影響を受けたものと考えられる。なお、この北村泰一は南極物語で有名なタロ・ジロ等犬の飼育係であり、南極に再度行った時取り残された犬たちと再会した当人である。ところで、福島さんは昭和34年理化学研究所に就職後、昭和35年第4次越冬隊に参加したが、この時ブリザードに巻き込まれ遭難、帰らぬ人となった。この時も犬に餌を与えに出たきり戻ってこなかったと言う話が残っている。この福島さんが桂子に南極に行く前（昭和34年頃？）手紙を送ってきている。それまでどの程度二人に交流があったかは定かでないが、明坂家と福島さんとの交流は続いていた。智子も昭和25年頃京大に入学した福島さんと会っている。西村家の従兄弟彰夫と福島さんとは仲が良く、智子が京都に旅行に行った折西村彰夫と共に福島さんに会った写真が残っている。また、満智子の娘の幸子は子供の頃日本に寄港中の南極観測船宗谷に乗船したことがあった。これも福島さんと明坂の交流の証だろうか。桂子は福島さんとの縁がなくなった後、勤め先が同じ日本相互銀行の後藤明男との縁談が起こった。口下手で風采も上がらないということで満智子は結婚に反対した。智子の夫の瑞穂は会ったこともなかったが慶応大学卒業で反対する理由もないと言っていたという。二人は昭和35年赤坂プリンスホテルで結婚式を挙げている。

後書き：本稿は山田（旧明坂）智子の口述や明坂4姉妹の従兄弟従姉妹の集い（令和5年

10 月) で語られた内容に基づき智子の二男山田仁が筆記したものである。また、撫順の生活については山田啓介の手記「戦後の記憶を辿って」から山田仁が抜粋した。

2023 年 11 月